



相談電話

027-221-0783

(おなやみなら)

群馬いのちの電話だより

2015.6 No.56

編集・社会福祉法人群馬いのちの電話 広報委員会
住所・〒371-8691 前橋中央郵便局私書箱6号
電話・事務局 027-221-1880 FAX027-220-5666

「自分事にする」ということ。

前橋市社会福祉協議会 地域福祉課 高山 弘毅

東日本大震災発生の1週間後に始まった、被災された方々と、全国から駆け付けるボランティアをつなぐ「災害ボランティアセンター」の運営支援をきっかけに、たびたび福島にお邪魔してきました。この春、ボランティアセンターから地域福祉課へと異動となり、「東日本大震災支援および災害ボランティアセンターに関すること」が担務から外れ、4年間続いた福島への旅もついにひと区切り。とはいえ、福島に向かうのは仕事だからか、美味しいものが食べたいからか、会いたい顔があるからなのか、もはや自分でもよく分からない状況だから、これからもお邪魔することにはなると思うけれど。

震災発生から1年を過ぎたころからでしょうか。現地の報道は目に見えて減り、その一方で「復興は進んでいますか？」というご質問をよくいただくようになり、そのたび問いに対する答えに悩んできました。

誰かが「復興」と口にするとき、それは社会機能の回復のことを指すこともあるし、その中で暮らす個人の暮らしの回復のことを指すこともあります。それぞれが漠然と抱くイメージの幅はかなり広く、どこを切り口にして考えるかによってずいぶん答えが変わるような気がします。

実際にぼくがお付き合いさせていただいている方々の状況も様々です。「仮設を出たら暮らせないよ…」「自宅を再建しました」「復興住宅に入居したいけど仮設で一緒の人たちと別れるのは不安」「震災前と生活は何も変わらないよ」「出来る仕事がないんだ」「働き手が足りない」「補償があつていいよな。俺は…」「補償なんかからないから元に戻してほしい」「津波があつたことをみんな忘れてるように思える」「福島を離れて暮らすことに決めた」「原発・放射能が不安で帰れない」「放射能のリスクを少しでも減らしながら暮らしていく」「もう気にしていない」…。

多様な価値観があり、多様な状況があります。その複雑さは、一括りにして考えようもないのですが、丸ごと受け止めることはとても難しく、苦しんだ時期がありました。多様であるが故に時に起こる、葛藤や対立。どんなに共感的に話を聴こうとしても、どんなにその気持ちを理解しようと努力しても、結局は当事者ではない自分。派遣期間を終えれば戻る場所があることへの後ろめたさ。「福島の今」を受け止めようとすればするほど募る疲労感や無力感。

そんな時意識したのは、一旦個々の暮らしの、

相談電話

027-221-0783

相談受付時間 午前9時～午前0時(年中無休)

深夜

☎027-221-0783

毎月第2・4金曜日は24時間受信

フリーダイヤル(毎月10日)

0120-738-556(8:00～翌8:00)

ひとつひとつの課題まで落とし込んで考えること。“福島復興”だとピントが合いにくいけれど、“〇〇さんの暮らしの回復”まで近づくと、具体的に解決策を考えることができるし、周囲と一緒に考えてもらえるよう話ができるようになり、自分事にして思いを寄せてくれるひとが出てきました。

誰かの課題に共感し、自分事と捉えその解決への取り組みに参加する、というプロセスを支えること。住民の主体性を支えながら、福祉向上を目指す運動体の側面を持つ社会福祉協議会の

職員としても考え方の根っこになる経験をさせていただいたと思っています。



あなたは何故、相談員を 続けているのですか？

そろそろお風呂に入って、と思っていると着信。「遅くにゴメンね」と詫びながら「お願いがあるの」と同期のKさんの声。内容もよくつかめない内に「ちょっと代わるね」と声は顔見知りのHさん。最後は継続でお世話になっているIさんの声。3人の重要人物の声を聴いたら、ギブアップ！！というわけで、「お願い」されたこの原稿。

だが、ギブアップしたのは、もうひとつのわけがある。私が一日を終えようとしていた時、彼女たちはまだ仕事をしていたのだ。相談員という役割に足して、広報という組織に欠かせない大切な役割を担ってくれている彼女たちから、「遅くにゴメン」と詫びられる筋合いは、私には無い。有難いと思った。この組織は、彼女たちのような人の集まりで維持されている。少しでも早く彼女たちが帰れるように二つ返事で受けた。

「苦しい、死にたい」というか細い声、「病との闘いに疲れた」という虚ろな声、性を媒介にしてつながろうとする執拗な声…。帰りの心は

重い。疲れ、ため息、後悔、何よりも無力感。こんな思いをして、自分だって悩みはあるのに、何故自分は辛い苦しい話を聴くのか？何故、わざわざ他人様の苦しみを足そうとするのか？少なからぬ時間と多大な心のエネルギーを使う「聴く」。なのに何故？自分は相談員を辞めないのか。繰り返される、玉葱の皮のような、自分への問い。

マザー・テレサは「愛」の反対は憎しみではなく「無関心」だという。助けを求める声に、解決策も励ましも持たないまま聴き続けることは、確かに「無関心」では決して出来ない。だが他者への「愛」を問いの答えとするには、今の私には得心がいかない。冒頭の彼女たちも、相談員の役割に足して組織を担おうとするのは何故なのか？

「聴きたい。」

あなたは何故、相談員を続けているのですか？
相談員というあなたの一部は、あなたが生きるのに、あなたをどのように支えているのですか？
(E. I)